2022年1月6日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名	早稲田大学
研究科名	大学院人間科学研究科
申請者氏名	山本　敦
学位の種類	博士（人間科学）
論文題目（和文）	熟練者に対するピアノレッスンにおける身体的相互行為を通した演奏表現技能の指導
論文題目（英文）	Embodied Interactions between University-level Music Students and an Instructor in Piano Lessons in Musical Expression Skills

公開審査会

実施年月日・時間	2021年12月06日・16:30-18:00
実施場所	早稲田大学　所沢キャンパス　100号館　第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	古山　宣洋	Ph.D.（Psychology）	The University of Chicago	実験心理学
副査	早稲田大学・教授	外山　紀子	博士（学術）	東京工業大学	発達心理学
副査	早稲田大学・准教授	関根　和生	博士（心理学）	白百合女子大学	発達心理学
副査	早稲田大学･名誉教授	根ケ山　光一	博士（人間科学）	大阪大学	発達行動学

論文審査委員会は、山本敦氏による博士学位論文「熟練者に対するピアノレッスンにおける身体的相互行為を通した演奏表現技能の指導」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について60分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要

発表に引き続き、以下の質疑があり、そのすべてに誠実かつ適切な応答があった。

1.1　(質疑)比較的データ数が少なく、参与者である学生の熟達度も中程度に偏っているが、研究の目的上問題はないか。

(応答)収録機会の確保に問題があり、データ数は少数に留まらざるをえなかった。ただし、本論文の目的の一つが分析の方法論の有効性の例証であること、本論文

が基盤とする社会文化的アプローチ的な学習観では学習を行為のための媒介の獲得とその使用による能力の拡張と捉えるため、事例数よりも発見された媒介＝相互行為的構造が学習者にどの程度広く使用されうるかが問題となる。本論文ではこの点に問題はないと考える。熟達度については演奏表現の指導を目的とするために意図的に統一した。

1.2　(質疑)指導の焦点は学習者の熟達度によって変化すると考えられるため、初心者からの縦断的データを用いるのがより妥当ではないか。

(応答)データ収録の制約と、演奏表現を可能にする技能全体の学習過程ではなく個々の演奏表現の学習過程を対象とするために横断的データを用いた。縦断的側面については発展的課題として今後検討していきたい。

1.3　(質疑)対象とした学習者が指導者と十全に演奏表現の指導の相互行為を行える状態＝相互行為上の構造（媒介）を既に獲得している点は、演奏表現の協働的構成という本論文の議論において問題ないか。

(応答)相互行為的構造を用いた演奏表現の協働的構成にはその獲得と使用という二つの側面があり、本論文は後者を対象とするため、直接の問題はないと考える。ただし獲得も興味深い問題であるため、今後検討していきたい。

1.4　(質疑)本論文において見いだされた相互行為的構造は、他の身体的技能の指導にどこまで一般化可能と考えられるか。

(応答)身体的動作が美的価値の産出に直結する音楽・ダンス等の芸術指導には一般化可能と考えられる。また、身体運動の微細な調整に関しては幅広い身体的技能の指導に一般化可能と考えられるが、現状ではその限界は明らかではない。

1.5　(質疑)分析の方法論的拡張として、会話分析の基盤とする常識的知識の概念の不十分さを指摘し記号論を導入しているが、分析された記号論的構造をデータ内の参与者たちが実際に用いているかはいかに確かめられるのか。

(応答)同様の記号論的構造を用いている複数事例の比較や、用いられた後の相互行為の展開の検討、相互行為全体の構造とそれが埋め込まれている実践との整合性の検討を通して分析の確度を高められると考える。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、修正要求はなかったものの、以下の点について修正することが提案された。

2.1.1　図の可読性が低い。楽譜があると分析が理解しやすくなるのではないか。

2.1.2　議論の核となる演奏表現の詳細な説明が後半の章にある等、構成がわかりにくい部分がある。「本論文の構成」や演奏表現の詳細な説明を冒頭に移す等の対処があると良いのではないか。

2.2　修正提案の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施された。

2.2.1　図の修正および楽譜の掲載を行った。主に図1.1、1.2が修正されたが、楽譜の掲載に伴い第3・4章の各図にも大小の修正がなされた。

2.2.2　第1章冒頭に論文の構成を説明する文章を追加した。演奏表現の詳細な説明を冒頭に移すことは論理展開の変更が必要となるため行えなかったが、演奏

表現についての議論が論文内に分散することを、理由と共に複数個所で言及することで構成に由来するわかりにくさに対処した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：ピアノレッスンにおいて言葉では伝えられない暗黙知的性質を持つ身体的技能としての演奏表現が、どのような相互行為構造を通して伝えられるかを明らかにすること、及びその方法論の検討を目的としており、学術的価値の観点から明確かつ妥当な研究目的と判断できる。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：上記の目的を達成するため、本論文では音楽大学における教授／プロの演奏者によるピアノ指導の録画データを用い、専門的実践における知覚と相互行為との関係を分析することが可能な分析手法である協働的行為分析を用いて検討しており、また、本論文を構成する第3・4章の内容は原著論文として公刊されていることからも、データ収録対象の選択および分析手法を含め、その研究計画と分析方法は明確かつ妥当であると考えられる。なお、本論文で実施した研究の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を取得し（承認番号:2018-066）、データ収録前には参加者に対し収録内容及び研究内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：本論文での理論的検討から、1)暗黙知的性質を持つ身体的技能の指導における言語の役割として、記述による知識の呈示の媒体に代わり、相互行為を通した相互調整による技能の共同的達成の資源という観点を導出したこと、2)身体的技能の指導のような、参与者間および研究者との間で振る舞いの意味の解釈枠組みの共有が前提できないデータに対しては、相互行為の分析で広く使われる会話分析の手法には問題があり、そこから派生した協働的行為分析が適することを明らかにした。また実証研究から、3)ピアノ指導で観察される、その範囲と表現上の特徴を特定しつつ演奏音に対してなされる指さしが、“楽曲-演奏運動-楽器-演奏音”という演奏音の産出に関わる因果的連鎖の特定部分を記号論的に強調することで理解可能なものとして組織されていることを明らかにしたこと、4)演奏表現の指導において、楽曲を呈示する様々な表現（発話・歌・演奏）と、それを強調するように様々な身体部位で産出される指揮のような軌道のジェスチャとの共起が、教示や理解の例証といった相互行為上の行為の資源となると共に、指導者と学習者との同期的なジェスチャ産出を通して、同時に演奏運動の調整の資源ともなることを明らかにした。これらの結果から、5)身体的技能の指導の研究における、相互行為を通した相互調整による技能の共同的達成という観点、およびその分析方法としての協働的行為分析の有効性を例証した。本論文から得られた成果は明確であり、また現実場面に当てはめても妥当なものであると考えられる。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 演奏表現技能の獲得を、指導の相互行為における指導者と学習者との共同的

な達成として分析した点。

3.4.2 分析の方法論として、従来用いられてきた会話分析の手法に理論的な問題があり、協働的行為分析がそれを解決する理論的装置を備えることを明らかにした点。

3.4.3 演奏音という不可視でありつつも聴覚的に現前し、様々な性質のもとに指示されうる対象に対する指差しという現象に着目し、その理解可能性が相互行為の中でいかに構成されるかを明らかにした点。

3.4.4 演奏表現を構成する知識・知覚・運動的要素の統合的な教示と学習者による演奏表現の達成が、参与者間でのジェスチャと楽曲を指標する資源の反復的・同期的な産出によって成されることを明らかにした点。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 暗黙知的性質を持つ身体的技能の指導において、言語が知識の記述ではなく、行為の共同的調整の水準で有効に機能しうることを例証した点。

3.5.2 協働的行為分析を用いることで、高度な身体的技能の指導での伝達・学習の共同的過程を詳細に分析可能であることを例証した点。

3.5.3 音楽大学で行われている指導方法を具体的な手続きの水準で明らかにしたことで、指導実践への知見の転用可能性を得た点。また、他の身体的技能の指導研究及び指導にも転用可能と考えられる点。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 社会学的な分析手法を拡張し導入することで、人間の社会的生活の重要な構成要素である身体的技能の、情報としての知識、知覚-身体的行為、規範といった諸側面の統合的な学習という心理学的問題に新たな光を当てる可能性のあるアプローチを提案した点。

3.7　不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4　学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

・山本敦・古山宣洋 (2020). ピアノレッスンにおける演奏表現のマルチモーダルな協働的構築. 社会言語科学, 23(1), 84-99.

・山本敦・門田圭祐・牧野遼作・古山宣洋 (印刷中). ピアノレッスンにおいて指導の焦点となる演奏音への指さし――記号論的領野に着目した身体的実践へのアプローチ. 質的心理学研究.

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上